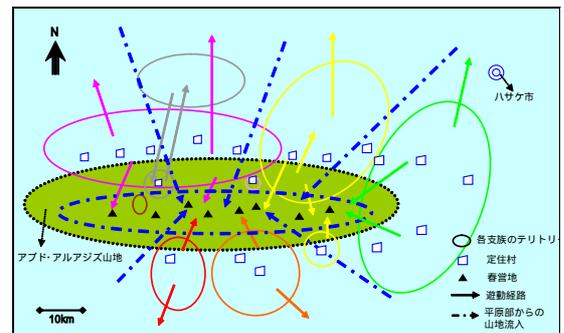


# シリアの牧畜社会の変容と資源管理

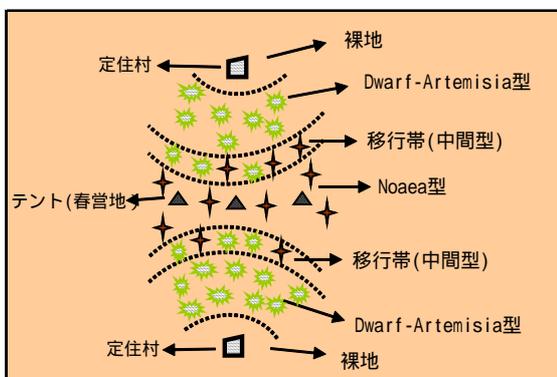
## 第5回：配列的な草原景観の形成

アブド・アルアジズ山地(以下、JAA)周辺には牧畜民の定住村が大小ふくめて58村存在している。しかし実際には牧畜民は家畜群をともなって季節遊動をくり返すので定住村とはいいいながらも住民すべてが1年を通して1つの村に居住することはきわめてまれである。遊動距離は数十キロ程であるが、基本的に世帯別経営となるため、季節遊動により一部の住民が村からでていたり、逆によその村から別の牧畜民が入ってきたりする。JAAは晩秋ごろから人口ないし家畜頭数がだんだん増えていき春から麦収穫季までの3~5月にピークに達する。山地全域における春営地の立地調査をおこなったのは1996年春<sup>注</sup>である。遊動は広域にまたがり、さらに内部の微地形の影響を受け、様相はなかなか複雑であり、限られた期間内で分散したかれらの遊動の実態をとらえるのにたいへん苦勞した。当時はGPSの精度はさほど高くなかったが(誤差±100m)、パジェロでJAAを駆けまわり、一時的に流入した全466世帯の地理座標をくまなくおさえていった。あわせて、部族(支族)名、出身村、JAAの滞在期間、宿営歴、遊動の動機等の聞きとり調査をおこなった。

紙面の制約から調査結果の詳細は省かざるをえないが、JAAの宿営地は世帯ごとの個別のつきあい関係で自由に選択されつつも、支族間で配分・分割されたテリトリーにより調整され定められること、同じ場所を数年つづけて利用する傾向があることなどが明らかとなった。JAAにおける部族、氏族の分割テリトリーと遊動経路を模式図で示すと右の通りである。一点鎖線の楕円内で示された山地中央部(以下、中央部)には恒常的な水源が存在せず、定住村は存在していない。しかし冬から春にかけての降雨により形成される水たまりや給水車による水補給で春営地が造営されるのは定住村周辺というよりむしろこの中央部である。遊動は、JAAの定住村からに加え、JAA外の平原部からの家畜群が加わる。また積極的に遊動をおこなうのが所有家畜頭数の比較的大きな世帯が中心になることから中央部は過放牧気味となり、植生が退行しアカザ科の *Noaea mucronata* が散在する景観が広がる。他方、山麓部に立地する定住村周辺では恒常的な放牧圧がかかるものの春の重点的な放牧は中央部への季節遊動により回避される傾向にあるので放牧に起因する退行は相対的に軽微なものとなる。この放牧利用とともに、前号で示した毎日のパン焼きを背景とする薪採取慣行が草原へのもうひとつの人為圧として加わる。薪の採取量の観点からみれば、短期的な利用の春営地近辺より定住村の周辺におけるほうが圧倒的におおきい。またこの採取圧からは、ある程度の放牧圧により矮生化した *Artemisia herba-alba* が薪として不適なことから選択的に残される。



遊動経路と各支族のテリトリー



草原景観の帯状構造

したがって定住村のまわりでは、人口、家畜頭数が適正であるならば、矮生化 *Artemisia herba-alba* が優占する Dwarf-Artemisia 型の草原が展開する結果となる。さらに定住村と春営地のあいだには漸移的な中間植生型が形成されるため、JAAの草原景観は北から南へ帯状配列していることがわかってきた。こうした人為的に改変された草原景観の成立背景には、定住化の流れのなかで次第に形成された部族(支族)のテリトリー分割、遊動経路、種選択的な草原利用など規則性の備わった牧畜民の環境利用方法がおおいに関与したとみている。

注：本調査は、ICARDA(国際乾燥地農業研究センター)-シリア国ハサケ農務局共同のJAA資源管理プロジェクト(1993-96年)において青年海外協力隊(JOCV)の一員として担当した牧畜民の環境利用に関する生態調査ないし社会経済調査の一環でおこなった。